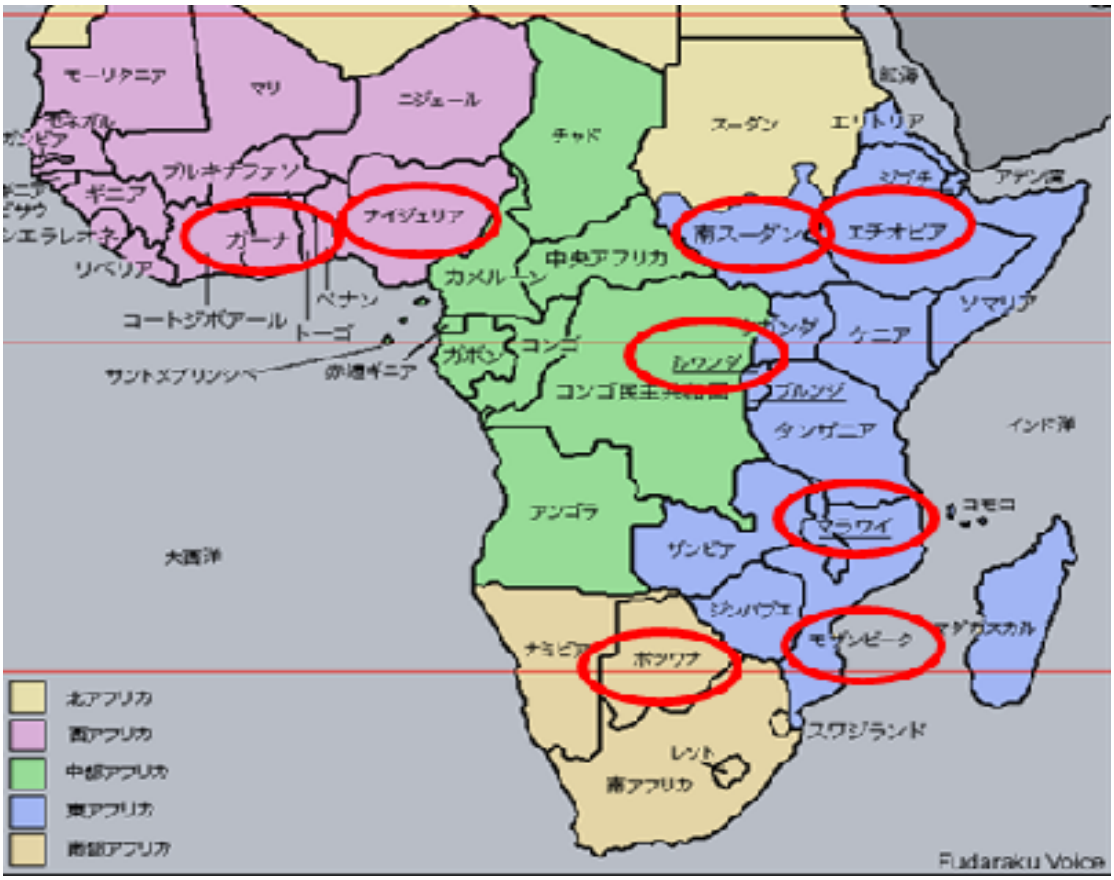
発行日2022 年 5月 20日

＊イフパット だより＊

～農民参加なくして農業なし～

第30号

イフパットがインターン生を受入（その2）



JICA筑波研修「農業を通じた栄養改善」Aコース研修員参加国

目次

・P 2　インターン生を受け入れて　イフパット主任研究員　小林　沙羅
・P 4　研修補佐及びITサポートとして　（株）アースアンドヒューマンコーポレーション　川合　菜月
・P 5　イフパットでのインターンを終えて　筑波大学1年　加藤菜々美
・P 6　同上　筑波大学1年　結城　寧々
・P 7　同上　筑波大学1年　小田島ナウラ
・P 8　2021年度課題別研修「農業を通じた栄養改善」コース概要

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク
NPO-IFPaT International Farmers Participation Technical Net-work

「農業を通じた栄養改善」Aコースでインターン生を受け入れて

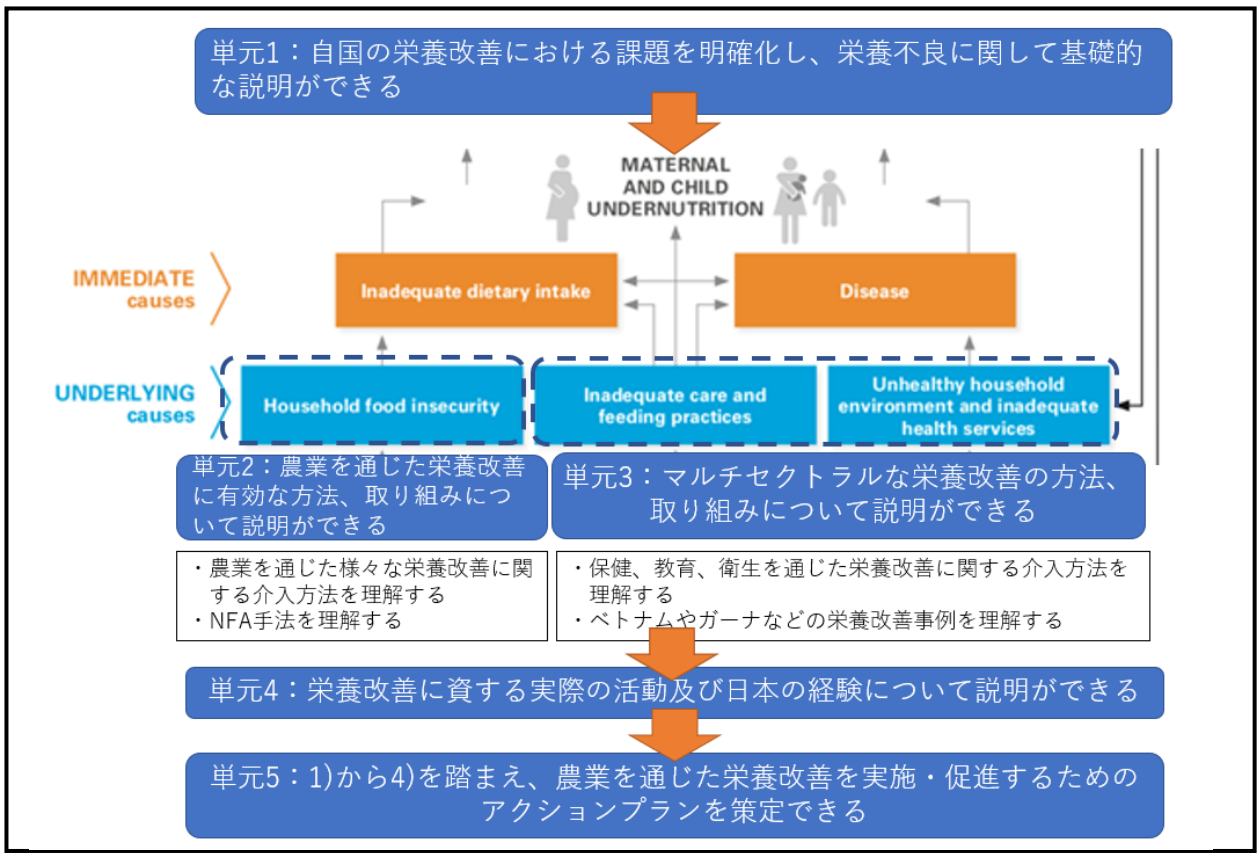
イフパット主任研究員　小林沙羅

JICA課題別研修「農業を通じた栄養改善」Aコースはアフリカ諸国を対象に2017年度に開始され、今年度で委託実施5年目となります。最初の3カ年は来日研修で実際に日本の現場視察等行っていましたが、昨年度より新型コロナウィルス感染拡大の影響で遠隔研修に切り替わりました。2回目となる遠隔研修では、筑波大学から3名のインターン生を受け入れ、オンラインではありながら研修テーマに関する活発な議論や来日時と同様に日本に親しみを持ってもらえる研修を行うことが出来ました。

まず始めに、インターン生がインターンシップ活動から学んだことの背景として、当コースの概要を説明します（図1）。本コースは農業を通じた栄養改善の実現に向けて、食料安全保障に向けた主食を始めとした農業生産の向上だけではなく、対象となるアフリカの国々が抱える栄養課題に対して、特定の栄養価が豊富な農畜水産物を普及する栄養素に特化したアプローチ(Nutrient Focused Approach: NFA)に基づき実施されています。本コースでは、ユニセフの「低栄養の概念枠組み」において説明されている栄養価の高い農畜水産物を適切に消費するための「母乳と補完食 (Care and feeding practices)」と、それらを不衛生な環境から起こる下痢や感染症などで吸収阻害が起きないよう、「衛生環境と保健サービス (Household environment and health services)」を考慮しています。

栄養改善を実現するためには栄養価が豊富な農畜産物を推進する農業セクター、補完食等を通じて適切な消費方法を伝える保健セクター、手洗いや感染症対策を推進する水衛生セクターなど、マルチ・セクトラルな介入が求められています。コースの参加者も各国の農業省を始め、保健省や栄養改善に関する調整機関から参加しています。さらに、セクターをまたがったジェンダーなどの課題にも配慮するため、イフパットが長年他コース等で実績を積んできた戦後日本の生活改善の経験も農村のコミュニティにおける栄養改善や、日本発の住民参加を通じた行動変容を促進するアプローチとしてコースの重要テーマとして扱っています。

図１．研修の構成



次に本コースで筑波大学の加藤さん、小田島さん、結城さんの3名のインターン生を受け入れた所感について書きます。本コースは英語圏アフリカ諸国を対象としており、議論を好む仏語圏アフリカ諸国を対象としたBコースに比べると概して研修員は大人しく、特に遠隔研修となると質問がすぐに出ない沈黙が起こることもよくあります。そんな時にインターン生には日本文化の概要や日本語の挨拶を紹介するプレゼンテーションを行っていただくことで、遠隔研修の雰囲気が一気にほぐれました。研修を通じて「アリガトウ」、「サヨウナラ」などの日本語が聞かれ、笑顔が見られました。研修終了後に研修員からは、「コースの内容そのものはさることながら日本人同士が互いを尊重し、協力し合う姿勢に感銘を受けた」というコメントも挙がり、来日が叶わなかった研修員の日本や日本文化への理解促進に繋がりました。

また、遠隔研修ではつきもののITスキルに関して苦労する研修員は多く、特にアプリケーションを使った栄養素計算の習得には「ダブルクリック」をすることさえ手が止まってしまうことも。遠隔でどこのボタンをクリックするかを伝えるにも四苦八苦します。そんな折、インターン生の方にはアプリケーションの使い方を説明するため、どのボタンを押すとどのようなページに飛ぶのか、一動作ずつを説明するわかりやすいマニュアルを作成いただきました（図２）。研修運営と研修員のフォローに追われてしまう中、総括では手が回らない部分にも丁寧に対応いただきました。

過去にもイフパットでは同大学からインターン生を受け入れて来ましたが、今回は初めての英語コースとなり通訳なしでも内容を理解してもらえることから、3名のインターン生の方々には1カ月間ほぼ張り付きで遠隔研修に参加いただきました。初めて聞く英単語や内容の講義にも研修員と共に一生懸命耳を傾け、時に脱線する研修員の議論も的確にまとめ、翻訳いただきました。アクションプラン作成など個別の作業にはブレークアウトルームの機能を使って、インターン生の方にも入っていただきました。特に国から1名のみの研修員にとっては、心強かったのではないでしょうか。インターン生の方々を通じ、研修員がITスキルやアクションプランのフォーマットについて困っている際にはすぐに対応することが出来ました。

図２．インターン生作成のNFAアプリ・マニュアル

コース終了後3名のインターンの方々にはイフパット内でインターンシップ活動の報告をしていただきました。3名とも途上国における栄養改善やジェンダーの課題などへの関心と、語学習得や将来教育などの分野において国際協力のキャリアを築くなど明確な目的意識を高めたことがわかりました。報告の際にはとても生き生きし、自信に満ちた様子が伺えました。コロナ感染症拡大の影響で途上国の現場になかなか行くことができない中でも、インターンの方々が持ち続ける国際協力への熱い意欲は、毎回自分が学生時代の国際協力を目指した初心を思い出させてくれます。またインターンシップのプログラムが、途上国の研修員だけではなく国内の国際協力を目指す若い人材育成の一助となっていることは受け入れ側としても大きな遣り甲斐となっています。

最後になりますが、イフパット若手職員によるコロナ渦で緊急帰国した協力隊を応援するためのセミナーを実施したことを通じて出会った川合さんには約1年半の間本コース、Bコース、そして南アジア・マルチセクターで取り組む栄養改善コースの研修補佐として大変お世話になりました。英語・仏語が堪能で、イギリスで栄養士の修士も取得されている川合さんには研修員も総括には言えない相談をする場面が見られたり、アクションプラン指導などもしていただくなど献身的に研修運営をサポートいただきました。今後は開発コンサルタントとしてのご活躍を祈念しております。

研修補佐及びITサポートとして

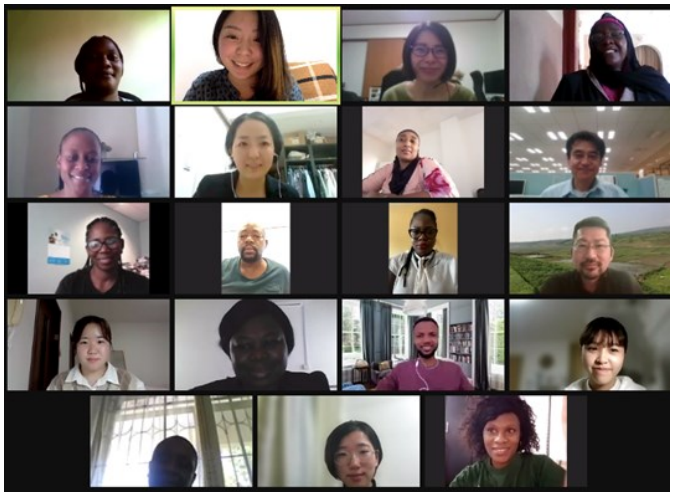


写真:【研修最終日の様子】

研修補佐及びITサポートとして

（株）アースアンドヒューマンコーポレーション 川合　菜月

研修補佐及びITサポートとして、約1年栄養改善研修を担当させていただきました川合菜月です。昨年の「農業を通じた栄養改善」B（仏語)コースに始まり、A（英語)コースや「南アジア・マルチセクターで取り組む栄養改善」コース等、計4回の研修を通じ、イフパットの皆様始め、多くの講師の方々や研修員から学ばせていただく機会がありました。

イフパットに出会ったきっかけは、2020年の夏に主催されていたJICA青年海外協力隊対象「第四回再派遣応援！栄養改善の事例とツール＆相談会」に参加したことでした。当時カンボジアの保健施設で栄養事業統括をしていた私は、セミナーの中で季節カレンダーや「考える農民」について学び、その中で自分自身がいかにカンボジアの暮らしを知らずに、現地の人々に関わっていたのかを痛感しました。日々病院に来る患者さんを受け入れることで精一杯だった私は、カンボジアの人が普段どんな生活を送り、どのように1年が過ぎ、各季節にはどんな行事や思いがあるのか、見えていませんでした。セミナーでの学びを機に、住民にインタビューを行ったり、村に足を運ぶ機会を増やし、その中で得た知見を元に、自身の事業を、ただ"与える"だけではなく、人々が自分で考えて続いていく支援に成長させることができました。

その後、ご縁をいただき、補佐として研修に参加させていただくようになりました。途上国の栄養改善に関わりたかったこと、「いつかアフリカの栄養支援を」と学び続けてきたフランス語を使いたかったことが繋がり、日々感謝と喜びの気持ちを抱きながら過ごした1年でした。

特に印象に残っていることが、２点あります。まず、戦後の低栄養から現在の「長寿大国」となった日本の栄養発展についてです。農家さんや生活普及員、地域の女性グループ、学校の給食や食

育、そして栄養士さんや公共の保健サービスなど、研修を通じ、日本の「栄養改善」を支えた基盤がいかに大きく、深く、確固たるものであるかを実感しました。私は現在イギリスに在住しており、栄養開発もイギリスで学んだのですが、地域の人々が協力し合い、栄養水準の向上に繋げてきた日本のこの経験を、もっと海外に伝え、そして途上国の栄養開発に応用していきたいと強く感じました。

２点目は、業務外にはなりますが、様々な働き方に出会えたことです。今回の全ての研修はオンラインで行われ、私はカンボジアやイギリスから業務を行い、イフパットの皆様もお子さんがいらっしゃったり、実家からお仕事されていたりと、各々のライフスタイルに合わせて業務を行われていました。これは、現在新卒2年目で国際開発を志す私が、「今後もこの分野で長く活躍していきたい」と思えた、非常に重要な出来事でした。海外勤務が多かったり、勤務地が変わりやすかったりと、不安定になりやすい本業界の中で、自身の専門性を生かしながら、生活と両立して活躍されている方々の間近で働くことができたのは珠玉の経験でした。

このお仕事を通じ、皆様に出会えたことは、キャリアだけでなく私自身の人生にとってもとても大きなものになったと感じています。ここでの学びを糧に、経験を重ね、国際栄養の場に貢献できる人材になれるよう、今後も尽力してまいります。本当にありがとうございました。

私の考える国際協力 ー イフパットでのインターンを終えて ー

3名の方からの報告

筑波大学国際総合学類

１年　加藤菜々美

２月から３月の２カ月間IFPaTさんでインターンシップをさせていただき、JICA筑波2021年度課題別研修「農業を通じた栄養改善」Aコースのオンライン研修に参加しました。インターン期間中に行った業務は、研修にオブザーバーとして参加すること、レポート発表やアクションプランの発表の際のタイムキーパー、質疑応答の記録、振り返りなどの日本語訳です。

私が研修コースを通じて学んだことは主に２つあります。一つ目は、栄養課題は低栄養だけではなく様々な種類の栄養課題があるということです。私は研修に参加する前は、栄養課題という言葉を聞くと飢餓や食糧難などがアフリカが直面している栄養課題であると思っていました。しかし、実際は私の認識とは異なり、栄養不良は低栄養だけではなく過栄養の意味も含むということを知りました。また、様々な栄養課題を解決するためにはマルチセクトラルなアプローチが不可欠であると学びました。

二つ目は議論を活発にすることは自分にはない新たな視点や気づきを得ることであるということです。質疑応答の際に研修員の方の間で活発に議論が行われ、「こんな考えもあるんだ。教えてくれてありがとう」などと伝えあっている姿を間近で目にし、議論をすることは自分の意見をただ言い合うだけではなく、新たな気づきや視点を得てより自分の理解を深めることであると感じました。

キャリアアップセミナーでは様々な方のお話をお聞きしました。キャリアアップセミナー以前は将来に関して漠然とした不安を抱いていましたが、国際協力への道筋は決まった道があるわけではなく、国際協力とは関係のないキャリアを経験したとしてもその経験は決して無駄にはならないとアドバイスいただき、自分の目標に向かって今自分ができることを精一杯やり遂げ、積極的に何事も行動していくことが何よりも大切であると感じ、自分の将来をポジティブ捉えることができるようになりました。

インターンシップを通じて変化した国際協力に対する考え方は、現地の人が国際協力において主役でなければならないということです。持続的に生活を改善していくには支援を待つのではなく、現地の人が問題を自分事として考え、自ら行動していくことが必要であり、現地の人の自発的な行動に寄り添い続けることを国際協力としてやらなければならないと考えるようになりました。

今回のインターンシップを次に活かしていくために今後の目標を立てました。短期的な目標としては、語学力の向上、そして海外ボランティアや海外インターンに参加し、現地に実際に行くということです。インターンを通じて日本からとらえる現状と実際の現状にはギャップがあると感じました。そこで現地に実際に行き、どのような問題があるのか確かめたいです。長期的な目標は国際協力を自分の職業にするということです。研修への参加を通じて私は栄養課題に興味を持ちました。栄養の分野で具体的にどのように国際協力として貢献するかは決まっていないので今後の学びを通じて方向性を定めていきたいです。また、栄養課題に限らず様々な分野について学びを深めたいです。そしてIFPaTの皆様と再び国際協力の場でお会いできるよう日々精進していきます。

最後になりましたが、至らないところが多い私のサポートを手厚くしてくださった小林さんや川合さんをはじめとするIFPaTの皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

筑波大学総合学域群第一類
1年　結城 寧々

２月から３月にかけて、インターンシップとしてIFPaTさんに受け入れていただきました。私のインターン生としての主な活動は、『JICA筑波2021年度課題別研修『農業を通じた栄養改善』Aコースへの参加でした。平日の夕方、日本とアフリカの８か国をつなぐオンライン会議室にて、オブザーバーとして研修に関わらせていただきました。研修では、研修員の方々の発表のタイムキーピング、質疑応答の記録、提出された振り返りの和訳などの業務を行いました。研修のほかには、IFPaTの職員の方々に、ご自身のキャリアを紹介していただくキャリアアップセミナーにも参加しました。

研修から学んだことは、主にふたつあります。ひとつめは、現状を正しく認識することの重要性です。対象地域の現状を把握、分析するコンテンツにおいて、私は日本とアフリカの食料事情の明確な違いを初めて実感することができました。宗教や伝統的な男女観など、アフリカと日本には大きな違いがあります。支援を行うにあたっては、自分自身が現地の状況を正しく認識することが不可欠なのだと気づきました。

ふたつめは、ジェンダー問題に関する学びです。児童婚などの伝統に関わる問題のほかにも、台所などの衛生環境の問題、家の中に女性の居場所がないなど、これまでの自分にはなかった問題意識の視点を得ることができました。研修でも、子どもの栄養不良の改善における母親への教育、妊娠可能年齢女性へのアプローチの重要性を学び、栄養、生活に関わる問題と女性に関わる問題は深くかかわっているのだと知りました。

キャリアアップセミナーからは、国際支援に関わるうえでの姿勢やライフコースについて学びました。まず、国際支援に携わる上での姿勢について、「改善は現地の人々が主体的に行うもの」という考え方を学びました。それまでの「支援」へのイメージは、「給付」「指導」など「与える」ものだったのですが、実際に現地で支援を行ってきた方々のお話をきき、「支援」とは「補助」であり、そうであるからこそ、実情に沿った改善や持続的な支援が可能になると知りました。ライフコースに関しては、「人を変える」仕事において求められる大学院での学び、家庭を持ち、家族をはぐくむことなどについて考えました。様々な選択肢の中から一つを選び、自分の人生を作り上げていくうえでは、明確な問題意識がなければならないと気づきました。

これらの学びを踏まえて、長期的な目標と短期的な目標を立てました。

長期的な目標は、ジェンダーに関わる問題を解決する支援活動を行うことです。私のジェンダー分野への関心は多岐にわたり、現状、どの地域のどういった人にどのように支援を行いたいのか、明確に思い描けていません。このための短期目標として、世界のジェンダー問題に関する情報を集め、問題点を知り、視点を増やすことで問題意識の明確化を図っていこうと考えています。さらに、対象地域の現状を正確にとらえるため、語学やコミュニケーションスキルを磨き、適切な改善支援をおこなうための手法への探求を続けていきたいと考えています。

最後になりますが、至らない点の多かった私にフィードバックとして数々の学びを提供してくださったIFPaTの小林さん、川合さんなど職員の方々に感謝申し上げます。この一か月間の学びは、私の大学生活において非常に貴重なものだったと思います。本当にありがとうございました。

筑波大学国際総合学類
１年　小田島ナウラ

今回、春のソーシャルインターンシッププログラムでIFPaTさんに受け入れていただき、JICA筑波2021年度課題別研修「農業を通じた栄養改善」Aコースについての遠隔研修に参加させていただきました。

インターン期間中の活動内容は、オンライン研修でのオブザーバー参加、研修員さんの発表でのタイムキーピング、研修に関わる書類の日本語訳、研修中の質疑応答の記録、研修員さんの課題作成等のサポート、研修員さん向けの日本文化紹介などです。

私がこの研修コースで学んだことは主に３つあります。1つ目は、各国が抱える、栄養に関する課題は様々であるということです。今回の研修はアフリカが対象だと聞き、はじめは低栄養のような問題ばかりを想像していました。研修が始まり、実際のところはアフリカでも過栄養の問題は存在すると知ったのは大きな驚きでした。

2つ目は、異なる分野同士が協力し、問題解決に向けてアクションを起こす必要があるということです。インターン開始前、栄養改善と聞いて栄養士さんのような方々が主体となって支援するものを想像していたのですが、農業や教育等、多分野にわたって取り組みが行われていることを学びました。さらに異なる分野同士が協力して問題解決に取り組むことで、単一分野での支援よりも大きな効果が表れるという点が重要だと感じました。

3つ目は、やり方は各々違っていても、皆目指しているものは同じということです。今回の参加した研修員さんもそれぞれ立場や役割は違いますが、「自国の栄養改善を達成する」という目標は同じなのだと考えました。

次に、キャリアアップセミナーで学んだことについてです。インターン期間中、毎週金曜日にIFPaT内外の方々がキャリアについてのお話をしてくださいました。様々なお話を聞いていくうちに学んだこととして、国際協力に携わるまでのルートは１つではないということです。これが正解、というような道筋はないため、自分で考え、行動していかなければなりません。そして、「結局あなたには何ができるのですか」と聞かれた際に、答えられるようになることが大切なのだと学びました。

インターン活動の前後で大きく変わった考え方としては、国際協力の主役は現地の人々であるということです。将来、現地の人々が自分たちだけでもやっていけるように手助けする、ということが国際協力なのだと考えるようになりました。

今後、このインターンの経験を生かすために、短期的目標と長期的目標を設定しました。短期的目標は、自分がどの分野から国際協力に携わるかを決めることです。現在は教育の分野を考えていますが、どの分野にしても、解決できる課題は多く存在します。どのような課題があるか、またその内容や解決のための手法について、大学在学中に深く学びたいと考えます。長期的目標は、JOCVに参加し、途上国の現状を少しでもよりよいものにするということです。派遣期間が終了した後も、違ったポジションから貢献し続けることができればと考えています。

最後になりますが、小林さんはじめ、2か月間にわたって手厚くサポートしていただいたIFPaTの皆様に感謝申し上げます。貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

JICA筑波2021年度課題別研修「農業を通じた栄養改善」　コース概要

研修の背景

近年、国際社会てば栄養改善への関心か高まっており、2015 年に採択された「持続可能な開発コール(SDGs)」においても「飢餓を撲滅し食料安全保障と栄養改善を達成し、持続可能な農業を促進させる」ことか達成目標の一つとして掲げられている。この流れのなかて、我か国は2016 年に開催された「第 6 回 アフリカ開発会議(Tokyo International Conference on African Development: TICAD VI)」において「食と栄養のアフリカ・イニシアチフ(Initiative for Food and Nutrition Security in Africa)(以下、IFNA)」の発足を宣言した。IFNAは、アフリカ各国と支援機関、農業セクターと他セクターかより連携を深めることて、現場ての具体的な取組みを促進し、栄養改善の達成を支援するものてある。

栄養不良状態の改善を実現するためには、人々か生産的な生活を営むために 必要な栄養素を供給するための食料の確保か重要なことから、園芸、畜産、水産を含む栄養強化作物生産等の農業生産の多様化や補助食品の生産、地産地消の促進といった、農業を通しだ取組か必要てある。本コースは、農村地域において農業を通しだ栄養改善に取り組むアフリカ地域の中央および地方政府機関の行政官を対象に、所属部署における農業を通しだ栄養改善プログラムを計画、実施、管理するために必要な知識と能力を強化することを目的として実施するものてある。

研修概要

「上位目標」
研修員の所属部署にて農業を通じた栄養改善事業が推進される
「案件目標」
研修員が農業を通じた栄養改善プログラムを計画、実施、管理するために必要な知識と能力を習得する
「単元目標」
研修員はプログラムを通じて以下の1)-5)を達成することが期待される。

1)自国の栄養改善における課題を明確化し、栄養不良に関して基礎的な説明ができる
2)農業を通じた栄養改善に有効な方法、取り組みについて説明ができる
3)マルチセクトラルな栄養改善の方法、取り組み
4)栄養改善に資する実際の活動及び日本の経験について説明ができる
5) 1)から4)を踏まえ、農業を通じた栄養改善を実施・促進するためのアクションプランを策定できる

「日程」
事前プログラム:2022年1月～2月
オンラインコアプログラム:2022年2月7日～3月4日

NPO便り第30号に寄せて

編集文責：永井　和夫

NPOイフパットの自主事業

私どもイフパットはNPO法人としての運営に必要な資金を会員会費の他、主にJICA（国際協力機構）からの受託事業で賄い、それら事業で得た収入の一定部分を自主事業の活動に充ててきました。現在まで、自主事業として①新規事業発掘のための現地調査（タイ、ラオス、ベトナム、エクアドル等で実施）②広報紙「イフパットだより」の発刊、③イフパットサロン（会員・一般向け国際協力活動報告と情報交換）の開催を行ってきました。

本イフパットだより３０号で報告したインターン生の受入は、令和２年度から始まりました。これまで2年間に8名を受入れています。全くのボランティア事業ですが、「長年の目標であったにも関わらず大学生になった途端にコロナ感染症のため海外へ挑戦する機会が制限され外国人と接する場を失くした学生。微力ながら私たちNPOイフパットとして少しでも社会貢献し、双方にメリットがあるようにという想いでインターン生受け入れに動きました。」（イフパット和田理事）との考えです。

今や、インターン生受入はNPOイフパットにおける重要な自主事業の一つと言えるのではないでしょうか。

「イフパットだより」に関する照会・連絡先
NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL：029-875-4771　E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ:http://npoifpat.com/